

## Oxford 大学と川崎学園の交流 - 10年の歩み

川崎 明德<sup>1)</sup>, 川崎 誠治<sup>2)</sup>, 畠 一彦<sup>3)</sup>, 佐々木 和信<sup>4)</sup>

1) 川崎学園学園長 〒701-0192 倉敷市松島577

2) 川崎学園理事長

3) 川崎医療福祉大学医療情報学科 〒701-0193 倉敷市松島288

4) 川崎医療福祉大学医療福祉デザイン学科

### 目次

1. はじめに
2. 交流プログラムの特徴
3. Green カレッジから Green Templeton カレッジへ
4. 交流の実績
  - a) 学園から Oxford 大学へ
  - b) Oxford 大学から学園へ
  - c) Review Meeting
5. 派遣スタッフが見た Oxford
6. 終わりに
7. 資料
  - a) 引用資料
  - b) GTC-KG Timeline Coloured

### 1. はじめに

学園は英国 Oxford 大学の Green Templeton カレッジ (GTC) (旧 Green カレッジ (GC)) と教員の交流プログラムを実施して来ました<sup>1)</sup>。このプログラムは2002年からスタートし、これまで川崎医科大学から13名、川崎医療福祉大学から2名が派遣されました。また Oxford 大学から12名が学園を訪れています。プログラム発足の状況、定期的開催される Review Meeting の様子や個々の教員の帰国後の報告などは、川崎学園だより、川崎医科大学学報などでその時々で紹介されています。本年プログラムが始まって10年を迎えるにあたり、将来の更なる発

展を願い、これまでの報告・記録を資料一覧にまとめ直して紹介し、さらに visiting fellow として Oxford に滞在した教員からのレポートとあわせ、これまでの活動を振り返りたいと思います。なお巻末に資料7b)として、この10年間の交流を経時的に記録した GTC-KG Timeline Coloured (英語版) を掲載しました。

### 2. 交流プログラムの特徴

ロンドン北西部の小都市 Oxford は、Oxford 大学 (ユニバーシティ) の所在地として有名です。900年の歴史を持つといわれる大学は、市内に分散するカレッジと独立した多数の教育・研究・診療施設等からなる集合組織の総称で、Oxford 大学という名称の建物はありません。Oxford 大学と Cambridge 大学の教育方法は共通で、'Oxbridge system' といわれています。そのシステムではカレッジが重要な役割を果たします。教職員は教育・研究・診療活動を夫々の研究施設や病院等で行い、一方大学院生・学生はカレッジを生活の場とし、教育指導・研究指導はスタッフのいるそれぞれの施設で受けることになります。教員は専門の施設で活動を行うと同時に、カレッジで学生指導を併任しています。Oxford には現在およそ38のカレッジがあり、学生はカレッジでの集団生活によって友人同士さらに師弟の間で人間関係を広げ、かつお互いに切磋琢磨しあうシステムです。カレッ

別刷請求先  
学校法人 川崎学園 総務部総務課  
〒701-0192 倉敷市松島577

電話: 086 (462) 1111  
ファックス: 086 (462) 1193  
Eメール: 3) hatak@mw.kawasaki-m.ac.jp  
4) kazus@med.kawasaki-m.ac.jp

ジは学生同士、また学生と教員との間の人脈形成に大きな役割を担っています。カレッジの行事を通して、Oxford 大学全体の横のつながりのネットワークが形成されます。カレッジの歴史をみる時、この独特なシステムがヨーロッパにおけるキリスト教、そして修道院の長い長い歴史と密接に関連していることがわかります。カレッジは人脈ネットワークを作る上で大切であり、Oxford はキリスト教を含めたヨーロッパの歴史を強く感じさせる街でもあるのです。カレッジの中には、専門に特化した大学院カレッジがあり、中でも Green カレッジは臨床医学系の大学院生を対象として、1979年に Drs Cecil and Ida Green 夫妻の寄付によって設立されました。Green カレッジの校章(図1 a)は、中央にギリシャ神話の医学・医療のシンボルである杖とそれに巻き付いている蛇、左右にカレッジのシンボルである天体観測所をあらわす星がグリーンカラーの中に二つ配置され

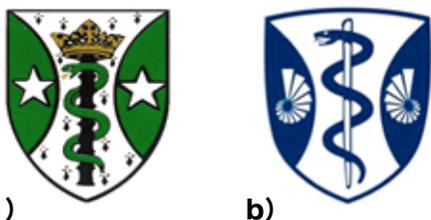


図1 カレッジの校章

- a) Green カレッジ  
b) Green Templeton カレッジ

ています。

2002年に川崎学園と Oxford 大学 Green カレッジとの間で取り交わされた「覚書」(A Memorandum of Understanding Between Green College, Oxford, and The Kawasaki Foundation, Kurashiki)により、相互の施設の教員・大学院生の学術的な交流をすすめるプログラムがスタートしました(図2)。Oxford に派遣された川崎学園の教員・大学院生は Green カレッジの visiting fellow として Oxford 大学に受け入れられ、カレッジが教員の希望に沿った大学の施設・研究者を推薦し、研究活動を支援します。

「覚書」は Green カレッジも学園に研究者や学生を派遣し、学園が受け入れることが謳われています。このプログラムによって派遣された教員は、Oxford 大学の研究施設で専門のテーマで研究活動を行うと同時に、カレッジを介し専門を超えて The University of Oxford という大きな輪の中に入ることができます。派遣された教員はカレッジの fellow として Oxford 大学の機構すなわち 'Oxbridge system' に入り、ユニバーシティそのもの、ひいてはヨーロッパの歴史の一端に触れられるわけです。それが研究のため特定の研究室に滞在する一般の留学と異なる点であり、このプログラムの大きな特徴です。

このプログラムを進めるにあたって、我々が心がけたことの一つは、“Green カレッジ側にできる限り負担を掛けないように”ということ

**A MEMORANDUM OF UNDERSTANDING BETWEEN  
GREEN COLLEGE, UNIVERSITY OF OXFORD, OXFORD, UK  
and  
THE KAWASAKI FOUNDATION (GAKUEN),  
KURASHIKI CITY, OKAYAMA, JAPAN**

*Preamble*

1. Building upon the long-standing trust established between them, Green College, Oxford, and the Kawasaki Foundation agree to extend and develop their existing co-operation with the aims and in the manner described in this Memorandum.

図2. Green カレッジと川崎学園の間で取り交わした覚え書き序文(2002年)

でした。派遣教員の選定ではコミュニケーション能力の高さや海外生活への適応能力にポイントを置きました。現地での生活体験のない我々には限界がありますが、Oxfordでの生活環境の情報集めに、当初は世話人の畠が前以て不動産業者の下見をしたりと、成功・失敗取り混ぜて試行錯誤の連続でした。カレッジは我々のこのような動きから、このプロジェクトにかける学園の真剣さを感じ取ってくれたに違いありません。問題にぶつかったとき暖かいサポートを続けてくれたカレッジの好意なくして、この10周年を迎えることはできなかったということを忘れてはいけないと思います。

### 3. Green カレッジから Green Templeton カレッジへ

Green Templeton カレッジ (GTC) は、Green カレッジ (GC) と Templeton カレッジという元々は別個のカレッジが合併し、2008年10月に誕生した Oxford 大学で最も新しいカレッジです。まず川崎学園が2002年に教員交流プログラムをむすんだ GC について、プログラムが締結されるに至った経過も含めて紹介します。

前述したように、GC は臨床医学系大学院生のためのカレッジとして、Drs. Cecil and Ida Green の寄付によって1979年に設立されました。カレッジの名称は資金提供者の名前に由来するものです。カレッジは Oxford の街を南北に縦走する Woodstock Road に面し、構内でひととき目立つ建築物は、天文観測所 “Radcliffe Observatory” で、現在もカレッジシンボルとしてディナーなどに活発に利用されています。この観測所はイギリスの天文学の発達に寄与し、その詳細なきさつは附属図書館が所蔵する “A history of the Radcliffe observatory Oxford”<sup>2)</sup> に紹介されています。また天体観測所の写真は「川崎学園だより」314号<sup>3)</sup>の表紙を飾りました。

臨床医学に特化したカレッジをめざす Green カレッジの初代学長 Sir Richard Doll (任期1979～1983) は、タバコ喫煙とヒトの肺癌との関連性を証明した Oxford 大学教授で、高名な疫



図3 GC 2代目学長 Lord Walton (資料2)より

学研究者でした。二代目学長 Lord Walton (任期1983～1989) (図3) は神経学の教授で、Newcastle 大学医学部長をつとめられました。イギリス医学協議会 (General Medical Council) 会長時代の1983年に、川崎明德理事長の誘いで学園を訪問されました。帰国直後 Green カレッジの学長となった Lord Walton と理事長とのおつきあいが、カレッジとの友好関係の始まりでした。なお、初代学長の Sir Doll は2005年に他界され、当時カレッジに滞在していた佐々木環教授がカレッジディナーでご一緒した時の様子を『研究ニュース』に追悼文として掲載しています<sup>4)</sup>。

Green カレッジでは3代目以降の学長は歴史・政治学などの社会科学系、副学長以下の運営委員は医学系出身者で構成されるようになりました。4代目学長の Sir John Hanson (任期1998～2006) (図4) は、ブリティッシュカウンシルの会長を勤められた後にカレッジの学長となりました。学園とカレッジの間での具体的な交流がスタートしたのは Hanson 学長の時代で、この交流プログラムの実現・発展には彼の行動力が大きな力となりました。

2000年に川崎明德理事長がカレッジを訪問し、それに答えて2002年に Hanson 学長らが学園に来られ<sup>5)</sup>、学園とカレッジとの学術交流の可能性が検討されました。2002年7月に教員交流プログラムの「覚書」が正式に締結されました。当時ミュンヘンに滞在しておられた植木名誉教授と畠が、「覚書」の実現化に向けて2002



図4 GC 4代目学長 Sir John Hanson のポートレート

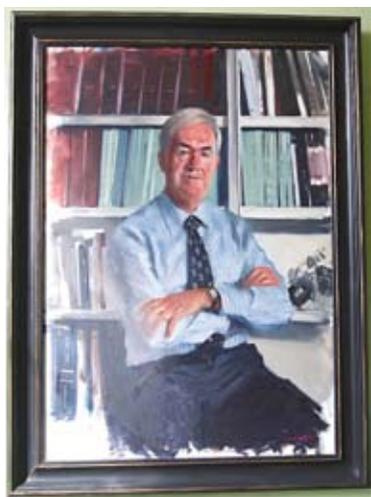


図5 GC 5代目 GTC 1代目学長 Prof Colin Bundy のポートレート

年11月にカレッジを表敬訪問しました<sup>6)</sup>。以来、Hanson 学長は John Sear 副学長 (麻酔科学教授) とともに数回来学し、visiting fellow の先生達と懇親を深めています。2006年カレッジの5代目学長に Colin Bundy 教授(図5)が就任しました。Bundy 学長は南アフリカのアパルトヘイトなどを専門とする歴史学の教授です。



図6 GTC 現学長 Sir David Watson カレッジ正門前にて。2012年6月

2008年10月、Green カレッジは Templeton カレッジ (TC) と併合し、Green Templeton カレッジ(GTC)が誕生しました。新カレッジがスタートした時の式典は GTC Newsletter の第一号に掲載され<sup>7)</sup>、川崎明徳理事長、植木学長と島さらに当時 Oxford に滞在していた砂田芳秀教授が立ち会いました。新カレッジの校章(図1b)は、Green カレッジの校章中央にも描かれている医学・医療のシンボルの「杖と蛇」、その左右に Templeton カレッジのシンボルで進化をあらわす「オウム貝 (ノーチラス)」が配置されています。この併合によりカレッジの構成は従来の臨床医学系に加え、法学、経済学、情報マネジメント、経営学、精神社会医学、生態学など幅広い分野へと発展しました。新カレッジの初代学長は GC から引き続き Colin Bundy 教授 (任期2006.10~2010.9)、二代目学長は Sir David Watson 教授 (任期2010.10~現在) です。Watson 学長 (図6) はイギリスの大学教育等を専門とする教育学・歴史学の教授です。臨床遺伝学が専門の Richard Gibbons 教授が窓口となって補佐し、学園との交流が進行しています。なお、カレッジの概要、キャンパス、運営委員および活動内容等は、カレッジのホームページ<sup>8)</sup>で紹介されています。ぜひ一度インターネットで訪問してください。

#### 4. 交流の実績

##### a) 学園から Oxford 大学へ

これまで学園から15名がカレッジに派遣され、その内訳は「短期」が11名、研究に重点を

置き約1年間滞在する「長期」が4名です。先生達が研究活動する施設の所在は、Oxfordの街の中で地理的に2ヶ所に大別されます。多くのカレッジや博物館・図書館および古い歴史を持つ研究所が集中する市中心部の University Science 地区と、もう一つはチェルエル川をはさんで街の中心から東に少し離れた Headington 地区です。Headington 地区には、John Radcliffe Hospital (JR 病院), Churchill Hospital, Nuffield Orthopaedic centre など、主要な医療施設が集中しています。この項では、派遣された教員による滞在報告を資料として、プログラムが進行した概要を派遣順で紹介します。なお、それぞれの先生の派遣時期と滞在期間は項目7. 資料b) GTC-KG Timeline Colouredに記録されています。

トップバッターは高田穰教授(医大・免疫学)で、彼は2003年9月から約4ヶ月間を Weatherall 分子医学研究所(Prof. Hickson)で過ごしました。JR病院の一角を占める研究所で過ごした経験を、高田教授は帰国後、学報100号(2004)に、米国での研究生生活と比較してレポートしています<sup>9), 10)</sup>。初めてのケースとしてカレッジからの配慮もあって、交流プログラムは順調にスタートしました。彼は Headington 地区での生活体験をもとに、Oxfordの街や住宅についての情報、イギリスの食事や生活習慣についての貴重な情報を川崎学園だよりや医学会講演会でレポートし、Oxfordでの visiting fellow としての生活を詳細に紹介しています<sup>11), 12)</sup>。なお、高田教授は現在本学を離れ、京都大学に赴任されましたが、研究所のスタッフとは継続してコンタクトをもたれ、共同研究を続けられています。

医福大からのトップバッター、岡田美保子教授(医療情報学)は同じく2003年秋10月からスタートされ、しかも彼女の場合、2004年5月までの8ヶ月という、このプログラム最初の長期滞在を果たされました。国際プロジェクトの豊かな経験と問題解決のバイタリティともに勝るものはない人選で、Sir John 学長にも医福大のイメージづくりに適任者と認められまし

た。Sir John Hanson 学長と Prof. Grimley Evans の紹介で Prof. Michael Goldacre (Unit of Healthcare Epidemiology, Institute of Health Sciences, Headington) に academic attachment され、話し合いの末、医師のキャリアアチョイスのテーマを勧められ、長期コホート研究の基礎資料の作成に尽力されました。しかし仕事場となる IHS には適当なオフィススペースもなく、実際にはカレッジの学長執務室に隣接する“ロトンダ”という古いミニ展望台を改装したスペースで、他の訪問者と日々競争でインターネット接続を確保するという毎日でした。彼女は2003年秋、日本医療情報学会の幹部として診療情報管理士の資格試験を立ち上げられた直後であり、ゼミ生の指導もあって、数回の一時帰国を余儀なくされました。日々時間と必死の格闘を重ねる彼女の姿を、Sir John 学長はしばしば目にするようになりました。Oxfordの住居事情のひっ迫で、滞在中に6回も住居を移らざるをえなくなるなど、想定外の実情に関係者も驚きました。その後の Review Meeting で Sir John 学長は彼女の健闘ぶりを称えるとともに、「今後このような無理な時間設定は絶対避けるべし」と言及がありました。岡田先生のこの御苦勞があってこそ、“快適”とっていい現在の派遣条件(ことに住居の確保)が整っていったと言えます。住宅事情の厳しい Oxford における短期滞在のための住居の確保には、カレッジからもいろいろサポートがありましたが、カレッジに近い Polstead Road に居住スペースが2005年に確保されるまで、visiting fellow の苦勞は尽きなかったようです。

医大から高田教授に次いで、原田保教授が派遣され、2004年4月から7月まで滞在しました。原田教授はカレッジの西に隣接する病院 Radcliffe Infirmary (RI) で、イギリスの耳鼻科診療の実際と臨床実習の様子を視察されました。帰国後、Oxford大学の3学期制(Michaelmas term, Hilary term, Trinity term)やイギリスのGP制度、学生の臨床実習の様子などが、医大の学報や病院公報に詳細にレポートされていま

す<sup>13), 14), 15)</sup>。なお、RIは建物の老朽化のため現在全面取り壊され、あたらしい近代的な建物への衣替えしつつあります。原田先生の宿泊には、カレッジの所有する Osler House (13 Norham Gardens)が提供されました。この名前のように、William OslerがOxfordで暮らした家で、カレッジの近くにあり、その一室に原田先生が宿泊、その後に派遣された大内教授もここに滞在することになります。Osler Houseは改修され、現在Oxford大学の医学生のクラブとして活用されています<sup>16)</sup>。

原田先生とバトンタッチするタイミングで、大内正信教授(微生物学)が2004年7月～9月の3ヶ月間、市中心部 University Science 地区にある Sir William Dunn School of Pathology (Prof. Brownlee)に滞在しました。研究室の様子、生活の様子、滞在した Osler Houseの様子など、帰国後詳細にレポートしてくださいました<sup>17), 18), 19)</sup>。ドイツで長い研究生活を体験された大内先生ですが、イギリスではカルチャーショックの連続だったようです。Oxford大学は10-12月、1-3月および4-6月の三学期制です。大内先生が滞在した7-9月は年度の変わる時期にあたり、多くの学生は帰省しカレッジは夏期休暇となります。そのため、大内先生は他の先生に比べカレッジとの交流の機会に恵まれなかったようです。その後カレッジからの要望もあって、短期滞在の期間設定は、カレッジが休暇となる7-9月を避けて調整するようになりました。ただし、大内先生の受け入れ先の研究所は夏期休暇中もフル稼働であり、実り多い研究成果をあげられました。

大内先生が帰国した後、内科学・糖尿病の川崎史子先生が医大からの長期派遣の第一号として、Churchill病院の研究センターに滞在しました。短期派遣が教授・准教授を対象とするのに対し、長期派遣は若手研究者を1年以上の長期間Oxfordに滞在させ、将来に向けて研究の芽を育てる事を目的にしています。当初は最低2,3年を目指していたのですが、イギリスの国内状況の変化で、研究目的で1年をこえる滞在に厳しい制限がつけられる様になり、最長1年が現実となりました。川崎先生は、Churchill病院の糖尿病・内分泌・代謝研究センター(Prof. David Matthews)で、英国在住日本人の糖尿病有病率をテーマに研究され、その経過を『研究ニュース』と医学会講演会でレポートしています<sup>20), 21)</sup>。川崎先生が帰国される時、滞在された時の様子がカレッジニュースで紹介されました(図7)。川崎先生は10月から初めの2ヶ月間を、ホームステイ付きの英語学校からスタートし、その後、カレッジの北約500メートルにあるFlemming夫人宅(6 Polstead Road)の一室に移転されました。以後、この一室が派遣された教員の生活の場として確保され、現在に至っています。これによってvisiting fellowは宿舎探しの苦勞から開放され、そのエネルギーをカレッジの生活や研究に集中できるようになりました。また、カレッジの元fellowであったTurner先生が積極的に派遣スタッフの生活をサポートして下さるようになり、2005年を境にOxfordでの生活環境が大きく好転しました。

川崎先生のOxford滞在時期に重なり、佐々



#### Au Revoir to Dr Fumiko Kawasaki

We said farewell at the end of January - temporarily, we hope - to Research Fellow Dr Fumiko Kawasaki who has been with us in Oxford for over a year conducting research in diabetes at the Oxford Centre for Diabetes, Endocrinology and Metabolism, thanks to the hospitality of Professor David Matthews and his colleagues. Fumiko played an active part in the life of Green College and made many friends here. She has now resumed her clinical duties in Kurashiki and we wish her well in her future medical career.

図7 Green College News, Issue 22, 2006の記事

学園から派遣されたDr F. Kawasakiの研究の様子と帰国がカレッジニュースで紹介されました。

木環先生(内科学・腎臓)が同じく Churchill 病院の腎臓センターに派遣されました。佐々木先生の宿泊施設として、カレッジから約500メートル北で、St Margaret Road の学生寮の一室が提供されました。そこで先生は Oxford の学生と一緒に生活し、寮を拠点として自転車で市街地を通り抜けて病院に通いました。Oxford の街の空気に触れ、街内に点在する大学図書館などの施設を利用し、その様子を研究ニュースや学報にレポートしています<sup>22), 23)</sup>。彼のレポートから“学究の街 Oxford”の様子を窺い知ることが出来ます。

佐々木先生が帰国された後、種本和雄教授(胸部心臓血管外科学)、そして1ヶ月遅れで青木省三教授(精神科学)が派遣されました。お二人は4月と5月の2ヶ月間を Oxford で一緒に過ごしたことになります。学園が確保した宿舎は Polstead Road のフラットだけですので、派遣期間が重複した場合は一方が住居を別に確保しなければなりません。1ヶ月遅れで Oxford に入った青木先生が、不動産業者を介して、フラットを2ヶ月間賃貸されました。滞在期間に重複が生じないようにには日程を調整するのですが、ご承知のように、主任教授の大学内外の業務はハードなスケジュールで、大変な努力の末にやっと滞在日程を確保できるのが現実です。お二人の場合も宿舎の利用を考えると、当然派遣時期をずらすべきでしたが、仕事上の日程とカレッジの休暇との兼ね合いから、多少の無理は承知のうえで強行したケースでした。お二人は逆境にもめげず、日中は研究、夜はスクラムを組んで Oxford のパブをエンジョイされたとの事です。

お二人が滞在した研究室は Headington 地区にあり、種本先生は JR 病院の外科学教室(Prof. Taggart)、青木先生は Churchill 病院に隣接する Warneford 病院の精神科学教室(Prof. Hawton)でした。種本先生は帰国後、ご自身の経験をふまえて、カレッジでの交流が大学の研究者の間のネットワークの形成に大切な役割を果たしていることをレポートしています<sup>24)</sup>。イギリス人

にとって、会食のメインディッシュは何を食べるかではなく、何をしゃべるかであることを実感されたようです。もっとも、ワインの味については、日英変わることなく大いに共感できたそうです。また、外科領域での日英の慣習の違いについても、手術室の様子を具体的に紹介し、言及しておられます<sup>25), 26)</sup>。またカレッジの Black-tie Dinner で知り合った看護学の Kitson 教授は、種本先生の紹介で2007年に学園を訪問し、医福大と医大とで講演されました<sup>27)</sup>。

青木先生は帰国後、イギリスの GP (いわゆるプライマリ・ケア医)について、また精神科医療における日英の違い、Oxford 大学の自殺予防研究所について詳細にレポートしています<sup>28), 29), 30)</sup>。青木先生は滞在中に、Prof. Hawton とカレッジから医学部学生である Nick Meyer 君を紹介されました。彼は日本の医療機関で精神科学を学ぶ事をつよく希望し、これがきっかけで2007年3月から約1ヶ月間、川崎医大の精神科学教室で臨床研修を経験しました<sup>31)</sup>。彼は卒業後、ロンドンの病院で精神科学を学び、2012年本学を再訪問し旧交をあたためたとのことです。カレッジの学長は青木先生の滞在期間まで Sir John Hanson でしたが、次の飯田先生の滞在時に Colin Bundy 教授に替わりました。

青木先生が帰国した1ヶ月後、医福大から飯田淳子先生が出発しました。医福大から2人目の派遣(2006年7月から12ヶ月)を果たされた飯田先生の専門は、医療人類学(medical anthropology)です。Green カレッジ fellow でおなじ専門の Dr. Elisabeth Hsu が2005年9月に学園を訪問された時の興奮を、彼女は今も物語ってくれます。自分の愛読した本の著者が目の前で講演していたわけです。Hsu 先生も飯田先生の博士論文のテーマが Thai massage であったことを知り驚かれました。いろいろな縁がつながり(というよりも飯田先生ご自身が Oxford での研究生活に ready な実力を持っておられたので)、医福大から2人目の長期派遣となりました。滞在場所は、6 Polstead Road、所属先は

Institute of Social and Cultural Anthropology (51/53 Banbury Road), 用意されたオフィスは School of Interdisciplinary Area Studies (12 Bevington Road) の1室と、まさに“Green カレッジの近隣住人”としての research fellow の1年を満喫されました<sup>32)</sup>。先生は1年間にわたり、学園に毎月“Oxford 便り”を送られました。“Oxford 便り”は不思議な Oxford の実情を文化人類学者の眼で内部から解説された貴重なエッセイで、関係者の深い関心を集めました。以後、長期滞在の場合、monthly レポートを学園に送ることが習慣となりました。飯田先生は帰国後も共同研究等で Hsu 先生との緊密な関係を維持し、2008年 Green カレッジから訪日した“ニート”の社会政策研究者 Tuukka Toivonen (当時 DPhil candidate) の医福大訪問の世話もされました。

医大から青木先生の後、約1年の間隔をあけて派遣されたのは、柏原直樹教授(内科学・腎臓)でした。Colin Bundy 学長のカレッジへ、医大からは初めての派遣となりました。先生は業務日程の調整の結果、滞在期間の一部がカレッジの夏期休暇と重ならざるを得なくなり、そのため所属研究室を渡英時に確定できないままに出発しました。Oxford に着いてから、現地で研究者に直接体当たりする“背水の陣”の派遣でした。その劣勢を跳ね返す様に、Oxford に到着してから、カレッジの fellow, JR 病院の腎関連の研究者や Fleming 医学部長など、短期間に幅広い領域で8名以上の先生とコンタクトされました。その時に感じ取った Oxford 大学の研究者の姿勢・信条などについて川崎医学会講演会で報告されています<sup>33)</sup>。講演会では“Maternal Origin of Adult Disease”というサブタイトルでイギリスでの食生活をヒントに、生活習慣病と遺伝要素との関連もお話しされました。帰国後も研究上での結びつきは継続され、教室の大学院生など若手の研究者が Oxford でコンタクトした研究者と共同で執筆した論文が先日刊行されました。

次に派遣された藤田喜久教授は専門が麻酔・集中治療学で、カレッジの副学長として本学を

数回訪れた経験のある Sear 教授 (JR 病院) が受け入れる事はすぐに決まりました。先生の場合、附属病院での業務上、短期派遣の原則である“3ヶ月間”彼が本学を不在にするのは難しく、滞在期間約2ヶ月で交渉が進められました。結局、“今回限り”という条件で、カレッジがOKを出したいきさつがあります。藤田先生が滞在した Polstead Road のフラットは、代々の滞在中者が残した生活用品なども増え、また携帯電話がつかえる様になった事から、プログラムのスタート時に比べると、Oxford での生活を始める際の苦労はずいぶん軽減されたようです<sup>34)</sup>。ホストの Sear 教授にたびたび誘われて参加したカレッジのランチの様子、教授と学生との関係についての感想、イギリスの麻酔医学の歴史等を、帰国後、詳細に報告されています<sup>35)</sup>、<sup>36)</sup>。

藤田先生帰国の半年後、砂田芳秀教授(内科学・神経)が出発しました。砂田先生が滞在した約3ヶ月の間に、前述したように Green カレッジと Templeton カレッジが合併し、GTC が誕生しました。その式典には学園から川崎理事長、植木学長、畠が出向き、共に歴史的な行事に参加した事を、彼は帰国後、医大学報にレポートしています<sup>37)</sup>。砂田先生は JR 病院の神経学教室をベースに、滞在中に専門領域である神経筋疾患の分野について、Dr. Hilton-Jones など臨床現場の専門医や基礎研究の場での臨床研究医と数多くの出会いと収穫のあったことを『研究ニュース』や医学会講演会で報告しています<sup>38)</sup>、<sup>39)</sup>。彼がコンタクトした基礎研究部門は Department of Anatomy and Physiology であり、そのような名称の教室の存在が実地医療に基づいて構築されたイギリス医学を物語っています。

医大からの長期留学の二番手として近藤敏範先生(内科学・血液)がイギリスに渡ったのは、砂田先生が帰国されて1年半後でした。長期の場合、その最初の数ヶ月を語学研修の期間として過ごすことができます。彼は、Oxford 大学の language centre の夏期コースを経て、その後 JR 病院の研究部門に滞在しました。大学院

の学位論文のテーマと関連した研究を中心に, Molecular Haematology Unit (Prof. Wainscoat) で過ごされました。複数の子供さんを伴ったファミリーでの生活を体験したのが, これまでのケースとの大きな相違点で, Polstead Road のフラットに短期滞在した後, 家族用の家を借りて生活する事になりました。Gibbons 先生, Turner 先生などカレッジからの迅速なサポートがあって, 家探しから転居, そしてご家族との生活が順調にスタートしたと聞いています。現在京都大学におられる高田教授のラボの先生が Oxford で研究生生活をおくった家に, 入れ替りで近藤先生ファミリーが住むことになりました。彼は Oxford での生活を飯田淳子先生のように学園に毎月レポートされ, 帰国後に医大生報に Oxford での生活を報告しています<sup>40)</sup>。

春間賢先生 (内科学・食道胃腸) は近藤先生の滞在と重なるように, 2010年の年末から2011年の新年を, Oxford ですごしました。ヨーロッパ全体が寒波に直撃された時で, 気候としては, 寒い, 暗い, 滑りやすいと最悪の Oxford でしたが, JR病院の Division of Gastroenterology (Prof. Travis) で, 最良の研修生活をおくられたと帰国後の『研究ニュース』で報告しています<sup>41)</sup>。春間先生は Sir David Watson が学長に就任して初めての派遣で, 我々は Watson 学長についての貴重な情報を教えていただきました。学長は2011年9月に Review Meeting のため, 就任後初めて Gibbons 先生とともに来学されました<sup>42)</sup>。

長谷川 徹教授 (脊椎・災害整形外科) は2011年12月から2月末までの3ヶ月間派遣されました。滞在先は, Churchill 病院の道を挟んで北に位置する Nuffield Orthopaedic centre の脊椎外科 (Prof. Fairbank) で, この病院への派遣は学園ではじめてでした。100名以上の整形外科医の集団に混じっての貴重な経験が, 学報116号 (2012) で詳細に報告されています<sup>43)</sup>。

#### b) Oxford 大学から川崎学園へ

2002年の取り決めにより, 2003年以来, Oxford 大学から11名の教員と2名の学生が学園

を訪問しました。その軌跡を年代順に紹介します。なお, ( ) 内は当時の役職です。

- 1) 2004.05.10 Sir John Hanson (Warden, Green College), Prof. John Sear (Vice-Warden, GC)<sup>5)</sup>
- 2) 2005.09.12 Dr. Elisabeth Hsu (Governing Body Fellow of GC / University Lecturer in Medical Anthropology)
- 3) 2005.09.18 Dr Richard Gibbons (Governing Body Fellow of GC / Reader in Clinical Genetics, Weatherall Institute of Molecular Medicine)<sup>44)</sup>
- 4) 2005.10.12 Dr. Kenneth Fleming (Governing Body Fellow of GC / Head of the Medical Sciences Division, University of Oxford; Clinical Reader and Consultant in Pathology)<sup>45)</sup>
- 5) 2006.04.11 Prof. David Matthews (Harris Manchester College/ Professor of Diabetic Medicine; Director, OCDEM - The Oxford Centre for Diabetes, Endocrinology and Metabolism)
- 6) 2006.05.17 Dr. Simon Plint (Director of Postgraduate General Practice Education, Department of Postgraduate Medical & Dental Education, University of Oxford)
- 7) 2007.03.28 Nicholas Meyer (Final-year medical student, GC)  
2007年3月28日から4月21日まで, 彼は精神科学教室で臨床研修をおこないました。研修に至った経緯, 本学での研修の目的, 精神科学臨床研修・診療見学の内容等を写真とともに“Medical Elective Report” (16ページ) としてまとめ学園に提出。GC の学生による臨床研修の第1例でした。<sup>31)</sup>
- 8) 2007.06.02 Prof. Alison Kitson (Supernumerary Fellow, GC / Executive Director of Nursing, Royal College of Nursing)<sup>27)</sup>
- 9) 2007.07.02 Dr. Colin Bundy (Warden, GC)<sup>46)</sup>
- 10) 2007.10.24 Dr. Jennifer Turner (Honorary Visiting Fellow of GC)<sup>47)</sup>
- 11) 2008.07.29 Tuukka Toivonen (Candidate for

DPhil in Social Policy, GC)

- 12) 2009.09.14 Dr. Colin Bundy (Principal, Green Templeton College), Dr. Richard Gibbons (Governing Body Fellow of GTC, Clinical Genetics of Weatherall Institute)<sup>48)</sup>
- 13) 2010.06.14 Dr. Richard Gibbons (Governing Body Fellow of GTC, Clinical Genetics of Weatherall Institute)<sup>49)</sup>
- 14) 2010.10.22 Sir John Hanson, Dr. Colin Bundy, Dr. J. Turner (Special guests for the 40th anniversary of Kawasaki Gakuen from GTC)<sup>3), 50)</sup>
- 15) 2011.09.12 Sir David Watson (Principal, GTC), Prof. Richard Gibbons (Governing Body Fellow of GTC, Weatherall Institute)<sup>51)</sup>

### c) Review Meeting

この交流プログラムの覚え書きには、倉敷とOxfordで交互にJoint Reviewのための会議が定期的に開催されること（当面は年一回）が申し合わされました。プログラムが長期間にわたって運用され発展を続けるには、お互いのコンタクトと意志の確認が必須という認識に基づき、これまでReview Meetingとして継続的に開催されてきました。ミーティングは2012年6月開催を含めるとこれまで7回おこなわれ、学園側のメンバーには、川崎明德学園長とともに医学教育振興財団の紀伊國猷三先生が必ず参加されておられます。紀伊國先生は長年にわたる国際的な医療活動経験に基づき、このプログラムの準備段階より参加されました。先生の貴重な助言のおかげで本プログラムが10年を迎えられたことを書き添えたいと思います。以下にこれまでのReview Meetingの記録を紹介します。なお、Oxford大学の出席者は当時の役職です。

第1回 2004年5月12日(水) 倉敷、川崎学園理事長応接室<sup>52)</sup>

GC: Sir John Hanson (学長), Prof. John Sear (副学長)

川崎学園: 川崎明德, 紀伊國猷三, 植木宏明,

安藤正人, 高田穰, 畠一彦, 佐々木和信  
第2回 2005年6月23日(木) Oxford, GC学長室<sup>52)</sup>

GC: Sir John Hanson (学長), Prof. John Sear (副学長), Dr. Richard Gibbons (GC fellow), Dr. Elisabeth Hsu (GC fellow)

川崎学園: 川崎明德, 紀伊國猷三, 岡田喜篤, 畠一彦, 佐々木和信

第3回 2006年9月6日(水) 倉敷, 川崎学園理事長応接室<sup>53)</sup>

GC: Sir John Hanson (学長), Prof. John Sear (副学長)

川崎学園: 川崎明德, 川崎誠治, 紀伊國猷三, 植木宏明, 岡田喜篤, 畠一彦, 佐々木和信



図8 第4回 Review Meeting  
オックスフォード GC学長室にて。2008年9月



図9 第7回 Review Meeting  
オックスフォード GTC-Barclay Roomにて。2012年6月



図10 10周年記念座談会の参加者 医大本館8F「楮の木」にて、2012年3月2日

第4回 2008年9月25日(木) Oxford, GC 学長室(図8)GCとTCの合併によってGTC発足。

GC: Prof. Colin Bundy (学長), Dr. Richard Gibbons (副学長), Dr. Elisabeth Hsu (GC Fellow).

川崎学園: 川崎明德, 紀伊國猷三, 植木宏明, 畠一彦

第5回 2009年9月15日(火) 倉敷, 川崎学園理事長応接室<sup>46)</sup>

GTC: Prof. Colin Bundy (学長), Dr. Richard Gibbons (GTC Fellow)

川崎学園: 川崎明德, 川崎誠治, 紀伊國猷三, 福永仁夫, 岡田喜篤, 畠一彦, 佐々木和信

第6回 2011年9月13日(火) 倉敷, 川崎学園理事長応接室<sup>49)</sup>

GTC: Sir David Watson (学長), Prof. Richard Gibbons (GTC fellow)

川崎学園: 川崎明德, 川崎誠治, 紀伊國猷三, 福永仁夫, 石井鎌二, 畠一彦, 佐々木和信

第7回 2012年6月22日(金) Oxford GTC at Barclay Room (図9)

GTC: Sir David Watson (学長), Prof. Richard Gibbons (GTC fellow)

川崎学園: 川崎明德, 川崎誠治, 紀伊國猷三, 福永仁夫, 畠一彦, 佐々木和信

## 5. 派遣スタッフが見た Oxford

このプログラムの10周年を記念して、医大・

医福大から派遣された教員スタッフの座談会が2012年3月2日(金)に開催されました(図10)。

初めての企画に13名の先生が集まり、それぞれの経験を熱く語られました。座談会を踏まえて、Oxford 滞在を短くレポートしていただきましたので、欠席の先生も含め、派遣順で紹介いたします。なお、レポート英語版は“Still In Transit!”として小冊子(図11)にまとめ、2012年6月22日にOxfordで開催された7th Review Meetingの資料としました。また以下の文章は、レポート

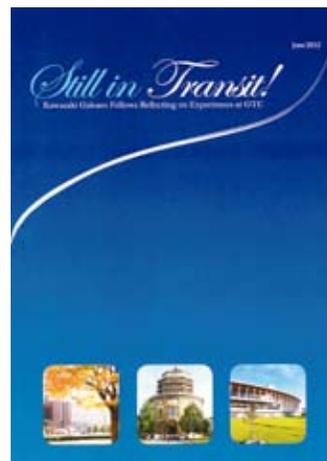


図11 交流プログラム10周年の記念英文冊子 オックスフォードを訪問した学園スタッフの感想をまとめた英語版小冊子(10ページ)は、GTCの広報誌“IN TRANSIT”を念頭に、“Still in Transit!”というタイトルとし、第7回 Review meetingの資料としました。

された先生のご意向を尊重し、できるだけ原文にそった形で掲載しました。

**高田 穰先生**（当時：医大免疫学，現在：京都大学 放射線生物研究センター）

医大からの第1号として、2003年の9月から12月末までの4ヶ月間、Oxford大に派遣された。幸運にもJR病院内のWeatherall Institute of Molecular Medicineにとても近い分野の研究室があることがわかり、近所の一軒家（を使ったホテル）に妻と娘と滞在した。Sir Johnに紹介状をいただいて、娘はRye St Anthony女子校に編入させてもらった。Peter McHugh博士のオフィスで過ごしつつ、Ian Hickson教授のラボで実験をし、日頃できない研究を進め、幾ばくかの成果も挙げた。その後も彼らとは共同研究や、シンポジウムの演者として来日してもらうなどの交流を続けている。医学教育の一端を垣間見る機会に恵まれ、カレッジディナーにも招待されて、忘れられない思い出である。この機会をいただいたことに心より感謝申し上げます。

**岡田 美保子先生**（川崎医療福祉大学医療情報学科）

2003年10月～2004年5月までの8ヶ月間、Greenカレッジに滞在しました。当初、住む場所を見つけるのに苦労しました。Institute of Health Science, Unit of Health-Care EpidemiologyのProf. Michael J Goldacreの研究室に配属となり、Sir John学長から実際に日英で行う共同プロジェクトを見出して欲しいとの指示がありました。できるだけアプローチを試みたところ提案いただいたのがDoctors' Career Choiceという長年実施されているコホート研究の一つでした。基礎資料の作成に力を入れ、日本での調査研究について関係者と様々な角度から相談しましたが、日本では実施困難との結論となり、断念しました。本格的プロジェクトは無理でも、一方的に論文を書いて共著を依頼することは難しくはないでしょう。しかし専門は医療情報学であり、専門性が一致していないと無理が生じます。一番重要なのは結局、専門性でしょう。

対話が生まれるのも、そこからです。また反省として、事前の準備期間がなかったので、学内業務の他、学会事業をはじめ多くの責務を抱えたまま行くこととなり、数回以上日本に戻るなど、良い過ごし方ではありませんでした。社会活動の多い人は計画的に2、3年かけて各種業務から解放された上で、行く必要があります。

**原田 保先生**（耳鼻咽喉科学）

2004年4月22日から7月15日までの約3ヶ月間Oxfordに滞在しました。GreenカレッジとRadcliffe Infirmary (RI)で医学教育システムと耳鼻咽喉科領域のすぐれた手術見学をすることができました。Martin Burton先生の指導の下、RIでOxford大学の医学生とともに外来患者や179症例の手術を見学することができました。これらを通して多くの医学的な事実を学ぶことができました。

**大内 正信先生**（微生物学）

Oxford大学で驚いたのは「一人の教員がチューター（メンター）として少人数の学生（10人以下）を入学から卒業まで一貫して面倒をみる。その小グループの集まりが1つのカレッジを形成し、学生と教員はそこから各自の専攻分野に従って講義室、教室、研究室、病院に出かけ、またそこに戻ってくる。カレッジは学びの共同体であり、Oxford大学は上記の共有施設と多数の学びの共同体から成る複合体である」点です（大学の公式説明ではなく個人の見解です）。

**川崎 史子先生**（総合内科学I）

すばらしい出会いと縁に感謝します。特にOxford生活がうまく行くようにいろいろと手配して下さったSir John Hanson、亡くなられたご主人が糖尿病の大家であったという縁で、いつも気にかけて世話をしてくださったDr. Jennie Turner、研究の指導をしてくださったProf. David Matthews、大家のMrs Jean Flemmingに出会えた事で楽しいOxford生活を送る事ができました。GCの食事は本当に美味でした。

**佐々木 環先生**（腎臓・高血圧内科学）

Greenカレッジでの思い出（学んだこと）

Oxford, Greenカレッジで多くの素晴らしい思い出

出を得ました。先ず腎臓病センターで Ian Roberts 先生, Prof. Chris W Pugh, Christopher Winearls 先生と一緒に臨床を経験させて頂き, 多くのセミナーやカンファレンスに参加し新しい技術や情報を得ました。今でも私の財産です。

日常生活での一番印象に残っているのは寮での生活です。そこで世界中の友人を得ました。環境や民族の違いを感じない日々でした。寮生活は快適で, また安全でありあらゆることに集中できました。木曜日のダイナーとランチの経験は, 大変貴重な人生の経験となりました。Green カレッジでの憶い出 (学んだこと) は, これまでの生活と大きく異なり, 時間を考えない幅広い視点をもった学問への姿勢です。

#### 種本 和雄先生 (心臓血管外科学)

ベストシーズンに訪れた Oxford

Oxford に着いたのは2月末で約3ヶ月間お世話になりました。特に前半は, 雪こそは少なかったものの毎日が寒くて, 風が強くて, よく雨が降り, なかなか来ないバスをずっと待っている時間の辛さは今でも忘れられません。しかしながら, 観光目的で訪れている訳ではないので, Oxford での生活を知らしむためにはベストシーズンと考えて生活しました。その気候の厳しさを補って余りあるほどのホスピタリティで迎えてくださったのが Sir John を始めたカレッジの皆さんでした。JR に通って議論した外科手技など, 今でも私の日常手術に生きているものはいっぱいあるし, JR の外科医達との交流は今でも続いています。訪れる者をファンにしないではおかない Oxford の魅力を全身で堪能させて貰って帰ってきました。

#### 青木 省三先生 (精神科学)

滞在中は, Oxford 大学精神医学教室・自殺予防研究センター長である, 自殺予防研究の世界的権威 Keith Hawton 教授に大変お世話になりました。Hawton 教授の助言によって, Oxford 内だけでなく, その他の地域・国の多くの研究者に会い, それぞれの自殺対策について学ぶことができました。そのような経験を生かして, 第36回日本自殺予防シンポジウム(2011年)で,

「生きたい……という気持ちをたぐり寄せる」という特別講演を行いました。

また滞在中, Hawton 教授より紹介された, Oxford 大学 Green カレッジの医学生 Nick Meyer 君は, 川崎明德理事長のご高配のもと, 2007年3月から3週間, 川崎医科大学精神科学教室に滞在し勉強することができました。現在は精神科医となり London 大学 King's カレッジ・精神医学研究所で, 臨床と研究を行なっています。2012年5月に, 川崎医科大学を再訪する予定です。将来, イギリスと日本の精神医学を橋渡しする人物になってほしいと期待しているところです。

#### 飯田 淳子先生 (医療福祉大学 医療福祉学科)

人生を変えた1年といっても過言ではありません。学問の歴史が刻まれ, 世界中から著名な研究者が集まる場で議論に参加し, 論文執筆・発表を行ったことにより, 視野, 思考の奥行き, 人脈, 研究活動の場が格段に広がりました。様々な人と交わした会話を, 今でも時折カレッジのスープの味とともに思い出します。Oxford で出会った友は私の生涯の宝です。貴重な機会を与えて下さった川崎学園と Green カレッジの関係者の方々に心より感謝申し上げます。

#### 藤田 喜久先生 (麻酔・集中治療医学 I)

百聞は一見に如かず

欧米の大学には, サバティカルといって研究や発想の転換のために7年ごとに大学教授などに与えられる 長期休暇の制度があります。私はオックスフォードでの2ヶ月間の滞在をサバティカルとして十分に活用させていただきました。このうち2点印象に残ったことを紹介します。

#### ・イギリスの医療制度

「何カ月も待たないと手術が受けられない」と, 日本で悪く言われているのがイギリスの医療制度です。医療者優先で患者は犠牲になっているイメージです。実は JR 病院では日本よりも倍以上の効率で短時間に上手に専門的手術が行われていました。イギリスの質の高い医療を支えているのは, 国民の順番を待つという寛容

さです。イギリス国民にはなんとか自分だけは特別にというわがままな考えはないのです。ですから、イギリスではこれまで18週待っていたのが、今年からは12週の待機で手術ができるようになったと、高い医療の質を維持しつつ徐々に改善がなされるわけです。日本の医療制度はだれもが待つことなく最良の医療を求めることから、医療制度は崩壊の危機にあり、医療者は疲弊し、そして結局のところ、国民は良い医療を受けられないという状況です。

#### ・ Nobles oblige の精神について

身分社会と批判的にいわれるイギリスです。しかし大学町 Oxford にて実際に、Flemming 夫人、Turner 夫人、Sear 教授、Sir Hanson の話を聞き、いわゆる上流階級である彼らの堅実な生活ぶりを垣間見て、イギリス社会を支えているのが Nobles oblige の精神であることを感じました。

イギリスは勉強をして、スポーツをして社会のリーダーとなるものはそれだけの高い道徳と規範が求められる社会であり、彼らはそれを実行しています。日本でも武士道の伝統があり、武士は名誉を重んじ、人のために犠牲になることを厭いませんでした。上流階級の持つ Nobles oblige の精神こそがイギリスの安定的発展と社会秩序のもとであると思います。ちなみに世界ではじめて麻酔科学講座が設立されたのが Oxford 大学であり、その初代の教授が Macintosh ですが、彼は第一次大戦の際には、最も危険なパイロットとして参戦してドイツと戦っています。また最近では Henry 王子がアフガンに、William 王子はフォークランド島に赴任しております。

#### 柏原 直樹先生 (腎臓・高血圧内科学)

忘れがたい人々：Oxford での交流

2007年7月、Green カレッジは夏季休暇の静寂の中にありました。学長室で、Colin Bundy 先生と Richard Gibbons 先生の温かい出迎えを受けました。早速 Richard から複数の研究者の紹介を受け、翌日から順番に各々の研究室を訪問することになりました。そこでデータを披

露し、意見交換を行いました。幸い微小血流を可視化した in vivo imaging の画像データのインパクトは大きく、複数の研究者と共同研究の糸口を見いだすことができました。中でも Keith Channon 教授、Nicolas Alp 博士とは意気投合し、内皮障害に関する共同研究を行うことで合意しました。急遽、医大から佐藤稔講師に来ていただき、具体的な研究の段取りをつけました。この他にも酸素センサー研究の世界的第一人者である Chris Pugh 教授、腎臓内科医 CG Winearls 先生、生理学者 Keith Bain 教授と知己を得ることもできました。Keith との共同研究は、本学大学院生である長洲一先生の論文に結実し、本年度 American Journal of Physiology 誌に発表することができました。帰国後、2011年度の腎臓学会総会の特別講演者として Richard と Keith の二人を招聘し、神戸で旧交を温めました。Bundy 夫妻、Gibbons 夫妻、Turner 夫人、Sir John Hanson、Brain 夫妻、多くの方々に、御自宅等で夕食にご招待いただき歓待を受けました。Oxford で出会った人々との交流、Oxford が醸し出す重厚な学術的な佇まいから、有形無形の大きな影響を受けました。この経験を川崎学園での教育、後進育成に活かしたいと願っています。このような貴重な経験を得ることができましたのも、ひとえに川崎学園と GTC との間の緊密な関係構築があったからであり、ご尽力いただいた川崎明德学園長、川崎誠治理事長、畠一彦教授、佐々木和信教授、学園関係者の方々に心より御礼申し上げます。

#### 砂田 芳秀先生 (神経内科学)

Oxford の想い出

私が Oxford に滞在したのは2008年9月から2ヶ月半、主に JR Hospital の神経内科 Dr. Hilton-Jones の専門外来でさまざまな筋疾患の患者を診察させていただきました。今まで診たことのない稀少な疾患も経験でき大変勉強になりました。滞在中の最大のイベントは9月24日に行われた Green Templeton カレッジの発足記念式典でした。川崎明德理事長や植木宏明学長も臨席された歴史的場面に立ち会うことが

でき光栄でした。祝宴の後、初秋の夜空に打ち上げられた美しい花火を忘れることはないでしょう。留学に際しお世話いただいた Richard Gibbons 先生からは英国の *gentlemanship* を学んだ。心から感謝申し上げます。

#### 春間 賢先生 (消化管内科)

私は平成22年11月23日から平成23年1月20日まで、Oxford 大学 Green Templeton カレッジと JR 病院消化器科に短期留学させて頂きました。英国滞在は初めての経験で、かなりの不安を持って出発いたしました。すべての部署で出会う方々が親切に、かつ親しく対応してくれ、快適でいつの間にか第二の故郷となりました。特に沢山のパーティに招待して頂き、その度に人の輪が広がり、お蔭で昨年は、当教室の鎌田智有講師が JR 病院に留学し、Oxford 大学との交流が始まる切っ掛けとなりました。

#### 近藤 敏範先生 (血液内科学)

##### Oxford 留学を糧に

この度開催された座談会に参加して、かつて派遣された先生方の体験談をお聞きし、それぞれに良い経験や知識または人と人との深い繋がりをもち帰られていることを改めて感じました。

私がこの交流プログラムで Oxford へ滞在させて頂きいただいた期間は2010年7月から2011年7月までの1年間でした。今、思い出してみると書き尽くせないほど多くの出会いがあり、経験があり、興奮があり、感動があり、苦労がありました。

Oxford 留学中に最も印象的だったことは、人との繋がりが強いということでした。私の留学に際して多大なご助力を頂きました GTC の Gibbons 先生や Turner 先生には、留学中を通じて生活のことや研究のことなどを常に気にかけいただき、大変心強く感じました。研究室の Wainscoat 教授はじめ研究員の方々は様々な国籍の仲間たちでしたが、温かく迎え入れていただき、とても感謝しています。昨今、私の手掛けた研究結果も含まれた内容の研究がまとまってきており、いずれ論文化されることを期待しています。居住地のご近所の方々も、とても親

切な方ばかりで、安心して過ごすことができました。私も家族にとっても日本に居ては経験できない貴重な体験をしたとても豊かな1年間でした。

英国 Oxford で収穫したものを今後の糧として、臨床・教育・研究に活かしていけたらと思います。最後になりましたが、GTC との交流事業を企画推進して下さいました学園長をはじめ、ご関係の方々には感謝申し上げます。

#### 長谷川 徹先生 (脊椎・災害整形外科)

このたびは GTC 留学の機会をいただき心から感謝いたします。今回の留学で得られたものは多く、特に以下の点については私の財産となっています。

1. GTC を通して Oxford におけるカレッジの機能について知り得たこと。
2. 整形外科診療を通してイギリス医療の現状を知り得たこと。
3. 基礎学部を通して医学部教育の特徴と基礎研究レベルの高さを知り得たこと。
4. 多くの方と親しく接し、知識と技術のシェアができ、友を得たこと。

#### 6. 終わりに

このプログラムによって、学園の多数の教員が Oxford 大学で学ぶことが出来ました。彼らは日本における大学の事情などを飛び越え、Oxford 大学と直に向き合い、若手が横綱の胸を借りるかのような貴重な体験を経て帰国しました。彼らの多くは、その後、医大や附属病院の幹部として、いまや学園をリードする地位で活躍しています。医学研究への情熱とセンスを持っていること、英語での意志疎通ができること、帰国後はその成果を学園に広く還元できること等を選考の基礎に進めてきた Oxford 派遣は10周年を迎え、始めは小さな点でしかなかった Oxford 大学との接点、やがて点と点がつながって線となって発展してきました。そして、それを軸として Oxford からゲストが学園を訪れるという新しい交流が生まれつつあることを、本稿項目5の「派遣スタッフが見た

Oxford」に感じる事ができます。

この10年の間に、OxfordではGreenカレッジからGreen Templetonカレッジが生まれ、学長も替わりました。一方学園でも、プログラムスタート時の川崎明徳理事長はこの4月に学園長となり、新理事長に川崎誠治先生が就任、2002年に取り交わした「覚書」にサインした双方が共に今、新しい体制へとシフトしました。そしてこの6月に、双方とも新メンバーで第7回Review Meetingが行われ、活発な意見交換が行われました。これからの10年、学園内のいろいろのより幅広い施設から、より多くの人材がOxfordを訪れ、一方、Oxfordからより沢山の人材を受け入れる相互交流へと発展することを心より祈念いたします。

## 謝 辞

医学教育振興財団 紀伊國献三先生には、本プログラムの準備にはじまって今日いたるまでの長期間、大所高所から多数の貴重なご助言とご指導を賜りました。こころより感謝申し上げます。教員の派遣にあたり、数々のご尽力を賜った医大前学長 植木 宏明先生および医福大前学長 岡田 喜篤先生、また本稿執筆にあたり貴重なご助言をいただいた医大学長 福永 仁夫先生に深謝いたします。さらに本プログラムの実施にあたっては、学園事務局、医科大学事務局および医療福祉大学事務部から、多大のご支援をいただき、10周年を無事迎えることができました。この場を借りてお礼を申し上げ本稿を終了いたします。

## 7. 資 料

### a) 引用資料 (文中の番号に対応)

- 1) 川崎学園創立40周年記念誌 2011, p16-17
- 2) Burley J, Loudon I: Green College At The Radcliffe Observatory. In "A history of the Radcliffe observatory Oxford" (ed.by Burley J & Plenderleith K), Oxford, 2005, p145-158
- 3) 川崎学園だより 314号 p1-5, 2005 「オックスフォード大学グリーンカレッジとの提携 2005年の展開」
- 4) 川崎医科大学『研究ニュース』66号 p63, 2005 「追悼 Green College 初代学長 Sir Richard Doll 教授. 佐々木環」

- 5) 川崎学園だより 274号 p14, 2003 「John Hanson 学長ら来学」
- 6) 川崎学園だより 283号 p12-14, 2003 「オックスフォードの友人 グリーンカレッジを訪ねて」
- 7) In Transit (Green Templeton College Newsletter) vol 1, 2008
- 8) GTC の URL <http://www.gtc.ox.uk>
- 9) 川崎医科大学学報 100号 p47-49, 2004 「ウエザオール分子医学研究所から. 高田穰」
- 10) 川崎医科大学学報 100号 p52-54, 2004 「オックスフォード大学に滞在して. 高田穰」
- 11) 川崎学園だより 300号 p17-19, 2004 「イギリスはおいしかったか. 高田穰」
- 12) 川崎医学会講演会 101回 2004.2.19 高田穰「オックスフォード大学グリーンカレッジに滞在して」
- 13) 川崎医科大学学報 101号 p18-20, 2004 「オックスフォード大学における臨床医学教育について. 原田 保」
- 14) 病院広報 117号 p26-27, 2004 「イギリスの医療事情. 原田 保」
- 15) 川崎医学会講演会 110回 2004.12.1 原田 保 「オックスフォード大学における臨床医学教育について」
- 16) Yurdan M. : The street names of Oxford, UK, History Pr LTD, 2009
- 17) 川崎学園だより 305号 p14-16, 2004 「オックスフォード体験記 -イギリスのペンキ屋さん & You are lucky. 大内正信・礼子」
- 18) 川崎医科大学学報 102号 p31-34, 2005 「教育に王道無し. 大内正信」
- 19) 川崎医学会講演会 110回 2004.12. 1 大内正信 「EnglishとDeutsh: 物を動かす文化と物を作る文化」
- 20) 川崎医科大学『研究ニュース』67号 p6-7, 2005 「Oxford 留学記. 川崎史子」
- 21) 川崎医学会講演会 212回 2011.7.12 川崎史子 「2型糖尿病治療のすすめ方」
- 22) 川崎医科大学『研究ニュース』66号 p65-66, 2005 「オックスフォードの街を一言で表現したら..... 佐々木環」
- 23) 川崎医科大学学報 103号 p14-17, 2005 「学問に接する至福 “オックスフォード大学で学んだこと”. 佐々木環」
- 24) 川崎医科大学『研究ニュース』68号 p50-51, 2006 「研究者間のつながりの重要性. 種本和雄」
- 25) 病院広報 125号 p10-11, 2006 「英国における心臓血管外科の現状と問題点. 種本 和雄」

- 26) 川崎医学会講演会 128回 2006.10.10 種本和雄  
「イギリスにおける外科医療の実情と問題点」
- 27) 川崎医科大学『研究ニュース』70号 p13, 2007  
「オックスフォード大学グリーンカレッジとの交流 - 平成19年8月までの活動記録. 種本和雄」
- 28) 病院広報 126号 p8-9 2006 「イギリスの精神科医療 - 病気になるならイギリスでの今. 青木省三」
- 29) 川崎医科大学『研究ニュース』68号 p51-52, 2006  
「イギリス自殺予防研究の動向. 青木省三」
- 30) 川崎医学会講演会 128回 2006.10.10 青木省三  
「英国の自殺予防研究および対策」
- 31) 川崎医科大学『研究ニュース』70号 p12, 2007  
「オックスフォード大学グリーンカレッジとの交流 - 平成19年8月までの活動記録. 青木省三」
- 32) 川崎医療福祉学会誌 18巻1号 p327-328, 2008  
「オックスフォード留学報告. 飯田淳子」
- 33) 川崎医学会講演会 151回 2008.5.28 柏原 直樹  
「英国生活で見えてきた生活習慣病の源泉 - Maternal Origin of Adult Disease」
- 34) 川崎医科大学『研究ニュース』72号 p10-13, 2008  
「オックスフォード大学グリーンカレッジ留学記. 藤田喜久」
- 35) 川崎医科大学学報 108号 p17-18, 2008 「イギリスでは麻酔科医を Anaesthetist という. 藤田喜久」
- 36) 川崎医学会講演会 151回 2008.5.28 藤田 喜久  
「オックスフォード大学グリーンカレッジ滞在報告 - Anaesthetist と Anaesthesiologist」
- 37) 川崎医科大学学報 110号 p33-35, 2009 「英国の専門医医療. 砂田芳秀」
- 38) 川崎医科大学『研究ニュース』74号 p8-10, 2009  
「英国での神経内科診療: 筋疾患専門外来での経験. 砂田芳秀」
- 39) 川崎医学会講演会 162回 2009.3.10 砂田芳秀「私が垣間みた英国の医療: その光と影」
- 40) 川崎医科大学学報 115号 p28-29, 2011 「オックスフォード留学を終えて. 近藤敏範」
- 41) 川崎医科大学『研究ニュース』78号 p35-37, 2011 「Oxford 大学グリーンテンブルトンカレッジ留学記. 春間 賢」
- 42) 川崎学園だより 388号 p6, 2011 「オックスフォード大学グリーンテンブルトンカレッジ ワトソン学長・ギボンズ教授 来学」
- 43) 川崎医科大学学報 116号 p26-29, 2012 「オックスフォード大学 GTC 留学報告. 長谷川 徹」
- 44) 川崎医学会講演会 116回 2005.9.20 Dr. Richard Gibbons “Clinical observations and basic science”
- 45) 川崎医学会講演会 118回 2005.10.12 Prof. Kenneth Fleming “Current trends in Medical Education in the UK”
- 46) 川崎学園だより 338号 p4, 2007 「バンディ新学長来訪」
- 47) 川崎学園だより 341号 p9, 2007 「オックスフォード大学グリーンカレッジからターナー先生来訪」
- 48) 川崎学園だより 364号 p2, 2009 「オックスフォード大学グリーンカレッジ バンディ学長来学される」
- 49) 川崎医学会講演会 182回 2010.6.14 Dr. Richard Gibbons “The Role of Chromatin Remodeling in regulation of alpha globin expression”
- 50) 川崎学園だより 378号 p4, 2010 「川崎学園創立40周年記念祝賀会 コリン バンディ学長 外国からの来賓代表挨拶」
- 51) 川崎学園だより 388号 p6, 2011 「オックスフォード大学グリーンテンブルトンカレッジ ワトソン学長・ギボンズ教授来学」
- 52) 川崎医科大学『研究ニュース』66号 p7-8, 2005  
「オックスフォード大・グリーンカレッジと川崎学園の交流」
- 53) 川崎医科大学『研究ニュース』69号 p5-6, 2006.  
「グリーンカレッジ/川崎学園 Review Meeting (第三回) の記録」

注) 「川崎医学会講演会」の資料は、講演内容がDVDに記録され、医大附属図書館の視聴覚コーナーで視聴可能ですのでご利用ください。

b) *GTC-KG Timeline Coloured*

Visits between Green Templeton College (GC/GTC) and Kawasaki Gakuen (KG) under the auspice of the Agreement

## ■2002

2002 Feb Sir John Hanson (Warden GC) & Prof. J Sear (Vice-Warden GC) visit Kawasaki Gakuen

2002.07.01 The Memorandum of Understanding signed (by exchange of letters)

2002 Nov Prof. H Ueki joins Sir John in launching the Agreement, at Oxford

## ■2003

#1. Prof. Minoru Takata 2003 Sep-Dec

#2. Prof. Mihoko Okada 2003 Oct-2004 May

## ■2004

#3. Prof. Tamotsu Harada 2004 April/22-July/16

2004.05.10 Sir John Hanson (Warden GC) & Prof. J Sear (Vice-Warden GC)

2004.05.12 <<<Review-1>>> at Kawasaki Gakuen, Chairman's office

#4. Prof. Masanobu Ohuchi 2004 July/5-Sept/30

2004.09.22 Vice-Chairman Seiji Kawasaki, Dr. Fumiko Kawasaki visit Sir John, at Oxford

2004.09.24 Dr. Fumiko Kawasaki visits Prof. David Matthews

#5. Dr. Fumiko Kawasaki 2004 Oct-2006 Jan

## ■2005

#6. Dr. Tamaki Sasaki 2005 Feb/23-May/25

2005.06.22 Kawasaki Delegation (AK KK KO KS KH) visits Green College, Oxford

2005.06.22 Honorary Fellowship bestowed to Chairman Akinori Kawasaki, MD PhD

2005.06.23 <<<Review-2>>> Oxford GC, Warden's office

2005.09.12 Dr. Elisabeth Hsu, Governing Body Fellow (GC)

2005.09.18 Dr. Richard Gibbons, Governing Body Fellow (GC)

2005.10.12 Dr. Kenneth Fleming, Governing Body Fellow (GC)

## ■2006

#7. Prof. Kazuo Tanemoto 2006 March-May

#8. Prof. Syozo Aoki 2006 April-June

2006.04.11 Prof. David Matthews, Harris Manchester College/OCDEM

2006.05.17 Dr. Simon Plint, University of Oxford

#9. Dr. Junko Iida 2006 July-2007 July

2006.09.04 Sir John Hanson (Warden GC) & Prof. J Sear (Vice-Warden GC)

2006.09.06 <<<Review-3>>> at Kawasaki Gakuen, Chairman's office

2006.06.10 Vice-Chairman Seiji Kawasaki visits Dr. Colin Bundy, Warden GC

## ■2007

2007.03.28 Nicholas Meyer, Final-year medical student (GC)

2007.06.02 Prof Alison Kitson, Supernumerary Fellow (GC)

2007.07.02 Dr. Colin Bundy, Warden GC

#10. Prof. Naoki Kashihara 2007 Aug-Oct

2007.10.24 Dr. Jennifer Turner, Honorary Visiting Fellow (GC)

## ■2008

#11. Prof. Yoshihisa Fujita 2008 February-March

2008.07.29 Tuukka Toivonen, Candidate for DPhil (Green College)

#12. Prof. Yoshihide Sunada 2008 Sep-Nov

2008.09.23 Kawasaki Delegation (AK KK HU KH) visits GC (GTC), Oxford

2008.09.24 Radcliffe Fellowship bestowed to Chairman Akinori Kawasaki

2008.09.25 <<<Review-4>>> at Oxford, GC Warden's (GTC Principal's) office

## ■2009

2009.09.14 Dr Colin Bundy, Warden GC & Dr Richard Gibbons

2009.09.15 <<<Review-5>>> at Kawasaki Gakuen, Chairman's office

## ■2010

2010.06.14 Dr. Richard Gibbons, Reader in Clinical Genetics

#13. Dr. Toshinori Kondo 2010 Jul-2011 Jul

2010.10.22 Sir John, Drs. C Bundy, J Turner visit Okayama

2010.10.24 The delegation joins in celebration of 40th Anniv. of the Gakuen

#14. Prof. Ken Haruma 2010 Nov-2011 Jan

## ■2011

2011.09.12 Sir David Watson, Principal GTC & Prof. Richard Gibbons

2011.09.13 <<<Review-6>>> at Kawasaki Gakuen, Chairman's office

#15. Prof. Toru Hasegawa 2011 Dec-2012 Feb

## ■2012

2012.03.02 Kawasaki Fellows reflect on 10th anniversary of GTC/KG Agreement

2012.06.21 Kawasaki Delegation (SK AK KK MF KS KH) visit GTC, Oxford

2012.06.22 <<<Review-7>>> at Oxford, GTC Barclay Room

(2012/07/01)